

4) 第4群

Table with 24 columns: 症例No., 年令, 性別, 疾患名, 化粧品皮膚炎既往歴, 1-24. Contains 40 case records for various skin conditions like 植物性皮膚炎, アダイン皮膚炎, etc.

5) 第5群

Table with 24 columns: 症例No., 年令, 性別, 疾患名, 化粧品皮膚炎既往歴, 1-24. Contains 11 case records for conditions like 口唇の色素斑, 肝臓菌, etc.

表9 1週後陽性反応を呈した症例

Table with 6 columns: 症例No., 年令, 性別, 疾患名, 化粧品皮膚炎既往歴所有者, 1週後陽性であった試料. Lists 6 cases with their respective test results.

表10 精製ラノリン陽性の7例のパッチテスト成績

Table with 14 columns: 症例No., 年令, 性別, 疾患名, 化粧品皮膚炎既往歴, 精製ラノリン (as is, 30%), ③極性ラノリン, ⑬ラノリンアルコール30%, ⑭ラノステロール10%, ⑮酢酸ラノリンアルコール30%, ⑯ポリオキシエチレンラノリンアルコール30%, ⑰イソプロピルラノリン脂肪酸エステル30%. Contains 7 case records.

(3/10), アルカン- α , β -ジオールイソ C₁₆ が14.3% (2/14), またモルモットの maximization test でラノリンアルコール10% (1/10), 還元ラノリン5.9% (1/17) の感作陽性率を認めた。その後、佐藤、小林¹¹⁾ はモルモットの modified maximization test により英国局方ラノリンアルコールに強い感作性を認め、さらに感作原はアルカンジオールではなく、ラノステロールの酸化誘導体であることを示唆する成績を報じている。

このように通常の感作試験ではラノリンの感作率がきわめて低い、臨床上市折ラノリンアレルギーが問題になるのはラノリンが外用剤や化粧品に汎く多用されてきたためと考えられる。Clark¹²⁾ (1975) はラノリンアレルギーの発生率が100万人中9.7人以下と推測、またラノリンの精製や粗製ワールワックスの回収、原毛選別に従事し、これらに日常接触する人約3,000人の場合も過敏症が生じなかつたと述べ、ラノリンアレルギーの頻度が低率であることを強調した。

ラノリンおよびその誘導体のパッチテスト成績も、これまでしばしば報告されてきた。例えば Sulzberger¹³⁾ (1953) はラノリン (as is) のパッチテストの陽性率が健常者0% (0/120) に対し、皮膚疾患患者1.1% (12/1048) であつたとし、Fisher¹⁴⁾ (1971) は外用剤皮膚炎の場合6.0% (6/100)、ベルギーの接触皮膚炎研究班¹⁵⁾ はアレルギー性接触皮膚炎患者の場合3.0% (9/300) (1972) および5.5% (76/1376) (1976) と報じている。

また Reichenberger¹⁶⁾ (1965) はラノリン過敏感症患者の場合、ラノリンそのもののパッチテスト陽性率は6.7% (2/30) であつたという。

30%のラノリンアルコールのパッチテスト陽性率は、湿疹・皮膚炎患者1.7% (Epstein¹⁷⁾ 1962, 2989例), 6.7% (Wereide¹⁸⁾ 1965) 2.7% (Mortensen¹⁹⁾ 1979 1230例), 1.2% (Hannuksela²⁰⁾ 1975), 北米接触皮膚炎研究グループ²¹⁾ 3.0% (1971-1972), 3.0% (1973-

1975) 2.9% (1975-1976) と報ぜられている。本邦では須貝ら²¹⁾ が精製ラノリン、還元ラノリン、およびラノリンアルコールの年次別陽性率を報じているが、1974-1976の3年間をみるとそれぞれ2.0%, 3.9%, 3.2%となつている。小塚ら⁷⁾ (1976) の化粧品、医薬品接触皮膚炎患者の陽性率は、ラノリン6.9% (4/58), ラノリンアルコール18.6% (18/97) であり、石原ら²²⁾ (1979) の女子顔面黒皮症、化粧品皮膚炎、化粧品が関係しない湿疹・皮膚炎、および肝斑、痤瘡その他の対照群での陽性率は、ラノリン (as is) 0% (0/45), 1.0% (1/100), 3.7% (3/81), 0% (0/27), ラノリンアルコール (30%) 4.4% (4/45), 4.0% (4/100), 4.9% (4/81), 0% (0/27), 還元ラノリン (30%) 0% (0/45), 3.0% (3/100), 3.7% (3/81), 0% (0/27) であつた。

われわれの24試料のパッチテスト成績は既述の通りであるが、(+) 以上を陽性とした場合の72時間後の陽性率は表6に示すごとく、精製ラノリン (as is) 0.5%, 同 (30) 1.4%と比較的低率であり、(+) 以上を陽性とした場合は、前者0%, 後者0.5%であつた。他方ラノリンアルコール (30%) の陽性率は (+) 以上のもの6.8%, (++) 以上のもの2.3%で、刺激反応が多分に考えられた精製ラノリン脂肪酸 (30%) を除く23試料中最も高い陽性率を示した。この他ラノステロール (10%), 酢酸ラノリンアルコール (30%), ポリオキシエチレンラノリンアルコール (30%), 還元ラノリン (30%) などのラノリンアルコール系の試料はいずれもラノリンアルコールよりは低率であるが、ある程度の陽性率を示した。これらはラノリンアレルギーの主因がラノリンアルコールであることを考えさせる。

表9は1週後にも陽性反応を認めた試料をまとめた成績で、6症例中ラノリンアルコール3例、還元ラノリン2例、ラノステロール1例、精製ラノリン脂肪酸1例、部分吸着精製ラノリン1例となつており、この成績もラ